

Title	赤羽一の生涯と思想
Sub Title	Life and thoughts of Hajime Akabane
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1966
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.39, No.9 (1966. 9) ,p.45- 64
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19660915-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

赤羽一の生涯と思想

中村勝範

はしがき

いつの世でも、社会に溶け込めない人間がいる。そのような人間は、隠遁生活に身をひくか、出でて反体制的な運動に身を投じるものである。

社会主義者の中には、正義、人道、解放を口にしながら、じつは溶け込めない社会に対する憎悪の表現として社会主義運動に入つていつた者がいる。明治の社会主義者の中にはこの種のタイプが多かつた。

これから見ていく赤羽一（号を巖穴という）もやはりこのタイプの人間であつた。はじめ彼は世俗的な「功名富貴」に憧れ、それへの執着は異常なものがあつた。幸徳秋水は、自分は三千世界十億人の中で最大の不平家である、自分は愉快とか得意ということを爪の

垢程も知らないといつたが、この幸徳の不平も赤羽のそれに比較すると物の数には入らない。

立身出世、功名富貴を望む一青年赤羽が、生存競争の中で敗残していく姿と自分を受けられない社会への復讐として社会主義へ進んでいくコースは明治社会主義研究上見逃すことのできないものである（註一）と思う。

註（一） 拙稿「明治社会主義者の孝情」（慶応通信『三色旗』昭和四十一年八月）の中で、赤羽の母親への孝情に触れておいた。

一、生涯

赤羽一は、明治八年（一八七五年）四月五日、長野県東筑摩郡広丘村郷原（現在は塩尻市）に生まれた。

赤羽の生家は、代々この地方の旧家であり、問屋を業とし、地主でもあつた。富裕な家庭に生まれた赤羽であつたが、彼の父無事は自由民権運動の政社「奨匠社」^(註1)に加盟し、のちに放蕩をつづけたため家計は苦しくなつていつた。母京は心配のあまり病気がちとなり、その上弟と妹の死があいついで起つた。父の借財を返済するために田畑山林を売り払つた。長男である赤羽の肩には一家の生活がかかつてきたのである。

余が父は淫逸の蕩子なりしかども、不義を憎むこと烈火の如くなる熱血を有したりき。余が母は無学の匹婦なりしかども、弱者を憫れむこと天使の如くなる温情を有したりき。思うに余がイト小き革命家として、現社会の暴悪を憤ること火山の如き熱性は之を父より受け、意弱く涙脆くして何事も忍ぶ能わざる軟き葦の如き温情は之を母より享けたるならむ。^(註2)

悲惨な生活と労働の中で、年少にして赤羽が身につけたものは、父の不義を憎むこと烈火の如き心と母の弱者を憫むこと天使の如き温情とであつた。この二つは彼の生涯を貫ぬく二本の線であり、彼はこの二本の鉄路の上を走る列車のように進むのである。

明治二十八年(一八九五年)九月、赤羽は東京法学院に入学するが、その前に彼は、弟宜十に家を一切まかせ、自分は親族にはかつて廢嫡届を出している。長男である彼が病身の母を残し、弟妹を置いて上京したのは年少の血気にはやり、大望を前途に懸け、功名富貴手に睡して取るべしと勇躍しつつ、慈親の愛に背いて故郷を出で

^(註3)
たのである。

明治三十一年(一八九八年)七月、東京法学院を卒業した彼は、日刊時事新聞「神戸新聞」社へ入社するために神戸におもむいた。「功名富貴」をいよいよ手中に収める時がきたのである。しかしながら事志と違つて彼は悶々の不平に苦しみ、社会の無情に心が激して狂者の如くなり、ついに死を決するのである。死は、洋の東西を問はず、あらゆる古狷の士、清節の士、高義の士、純潔の士、すなわち心に万古貫照の大主張を抱いて我が道つに行われずと慨し、此の醜々たる汚土に空しく聖霊をけがさんよりはと悲憤せる古隠士古君子の取れる唯一の涅槃境であると彼は考える。その点、赤羽も悶々の不平を懷いて我が主義の行われざるを世に絶叫することに於いて古隠士、古君子と同じである。^(註4)というのである。神戸には半年しか在任せず、翌明治三十二年(一八九九年)一月には上京した。

赤羽は「功名富貴」を望むわけだが、それは世俗的な功名富貴でないといつた。

今日の所謂の成功は詐偽を意味するではないか。偽善を意味するではないか。腐敗を意味するではないか。墮落を意味するではないか。そして今日の所謂成功者なるものは、殆んど盜賊や、詐偽師や、巾着切や、殺人と何の扱ふ所のない動物であるではないか。^(註5)

右の文字は、彼が自殺を考えた時より四年程後のものであるが、だからといつて自殺を企てたときの不平、苦悶、主義と異なるというものではない。功名富貴を求めながら、しかし功名富貴の内容が

「正義に伴う功名^(註6)」でなくてはならず、また「正義を伴う富貴^(註7)」でなくてはならなかつたところに彼の苦悶があつた。なぜならば、現実の日本では、良心を麻痺させ、冷血、冷情、冷頭、冷脳、あらゆる寒い、冷かな、残忍な、酷薄な、野蛮な動物性とならなければ、成功という悪魔は人間を迎えぬからである。これでは、成功した人というのは盗賊や巾着切の仲間ということとならなかりがたい。赤羽は、こういう成功は恥辱であり、その恥辱たるや緒い衣服を着て監獄で苦役するのとなんら異なるところがないと考へるのである。上京した彼は、半夜荒燈の下で、現世の欠陥と醜汚に思い及べば古人ならねど曉鶏を聴いて起つのに堪へないのだ、と内村鑑三に訴へるのである。この頃の彼は「社会改革の政論家」になりた^(註8)いと希望していたが、家郷においてはその「名を聴いても身顛いのする程厭^(註11)」になれとすすめていた。

内村鑑三に訴へても彼の苦悶は救われなかつた。しかし、家郷のすすめ「俗吏」にもならなかつた。赤羽は、島田三郎の出していた『革進(青年革進協会の機関誌)の記者となり、ついで松村介石が『警世』の刊行を企画すると松村家に寄宿して、これに筆をとつた。『日本人』にも数多く寄稿したが、彼の目ざす功名富貴は得られなかつた。

明治三十三年(一九〇〇年)十月四日、赤羽は赤痢で入院した。病院で考へることは故郷を出て七年目になるのに、この間一度も帰省しないその故郷のことである。遊子病魂帰故郷、攪来枕頭涙縦横と彼は表現したくらしいのホーム・シックにおちいつた。これほど故郷

を慕い、懐かしく思いながら、出郷七年の間一度も帰省しなかつたのは何故であるか。それは彼の文字ではつきりされてゐるよう「無智、短才、故郷に齎らすべき名も持たねば、勿論富も持たず、襦袢を曳いて郷に帰るべきことの如何計り、腑甲斐なく、情なく、恥かしく、胥ねては家名を損じ、父母の名を汚し、故郷の栄光を墮すべき」という点にあつた。功名富貴を旨とし慈親の愛に背いて故郷を出た以上、それなくしては死すとも帰省はできないというのである。このように追いつめられたような生活をしてゐる彼が過去をふり返つて思ふことは、「僕が既往廿七年の生涯は殆んど涕の生涯であつた、苦しみの生涯であつた、艱難の生涯であつた、血の生涯であつた、而してあらゆる不幸不運の生涯であつた」ということである。彼が自殺を企てたのは、二十七年の間に、先述の神戸時代の一回だけではないようである。「顧みれば半夜孤燈の下に坐して人知れぬ暗涙に咽んだ事も幾度であつたであろう、或は思い逼つて七首を把り將に万事を休せんとした事も幾度であつたであろう、或は月明く霜白き夕、河畔に行吟しては三間太夫の後を趁わんとした事も幾度であつたであろう、或は深夜深林に彷徨い入つて、六尺煩惱の臭皮袋を將に樹枝に懸けんとしたことも幾度であつたであろう、今にして思えば僕が現在生きて居るのが不思議な位である」という文字は、青年の感傷のそれと大分内容が違ふ。なるほど、この文字だけをとつてみると青年が共通して抱く感傷に通じてゐる。しかし、後に見るやうに獄死するときの彼の「決意」を知れば、彼のこの文字は単なる感傷とは決して言えない。

彼をしてこのように何回も自殺を考えさせる日本という国は、彼にとつてまことに住みにくい国となつた。「祖国に於ける余目下の境遇は、到底吾志を為すに足らざるを思い、又吾才を展すに足らざるを思い」、自由の新業土を求めてアメリカへ渡る決心をしたのが明治三十五年春である。アメリカへ渡るといふのは「どうしても功を策て家を興して父母の名を顕わさねばならぬ責任」からである。とはいへ、決して親が赤羽に功名富貴を得よというわけではない。

明治三十五年十一月、余故国に志を得ず去つて米國に赴かんとするや、母余に餞して曰く、爾能く妾の語を記せよ、妾の爾に望む所は爾の錦衣帰郷にあらずして唯だ爾の身体の健康也と、余黯然として涙を飲み此の慈愛の語を胸に畳みて故郷を去れり

これは、アメリカへ行つても功名富貴よりは身体を氣をつける、と母が言つたようにとれる。しかし母は赤羽がアメリカへ行くのを止めたのである。その間の事情は別の所にはつきりされている。偉い人、学者にならなくてもよいから、アメリカというような遠い国へ行くのは止めて、日本で分相応の事をして家庭をつくつてくれ、というのが母の望みであつた。赤羽といへども無闇とアメリカ行を望むわけではない。愛の家庭を作りたいのは山々であるが、境遇はそれを許さぬ、運命はそれを許さぬ、日本の同胞はそれを許さぬ、そして我れの功名心はなおさらそれを許さないのである。それほどまでにアメリカへ行きたいのなら、錦衣帰省にあらずとも身体だけは氣をつける、というのが最後の母の餞別の言葉だつたのである。

アメリカに渡る前に、赤羽は『嗚呼祖国』を出版した。明治三十五年(一九〇二年)八月である。そして、この年の十一月、横浜より出発したのである。十二月、サンフランシスコに到着し、この日本人福音會に寄留した。明治三十六年(一九〇三年)十月、在米邦人の経営する『新世界』新聞社の社員となつた。

赤羽が社会主義の運動らしきものにはじめて接したのはサンフランシスコ在住中であつたといつてよいであらう。アムステルダムの万国社会党大会に出席するために、日本社会主義者の代表として片山潜がサンフランシスコにきたのは明治三十七年(一九〇四年)三月であつた。片山は、ここで日本人桑港社会党を組織したが、この時、赤羽は幹事に推された。活動らしいことはあまりしなかつたが、それでも赤羽にとつてみると最初の社会主義運動の経験であつた。

赤羽がアメリカで社会主義運動を体験したということは何を意味しているだろうか。それはこの地でも功名富貴を得ることができなかったということではなからうか。彼には父から受けた不義を憎むこと烈火のごとき熱血が流れており、それが彼をして社会主義運動に傾斜させる大きな要因であつたかも知れないが、もし彼にしてサンフランシスコで彼の望む功名富貴を得ていたならば社会主義運動に飛び込んだかどうか疑問である。赤羽は日本を発つ時、月々二十円位ずつ送金することを約束したがそれもできず、母が半年も前に送るようにと言つた赤羽の写真は、彼の生活の不如意から送ることが出来なかつた。この生活の窮乏から彼はつぎのような言葉を書きしるしたのである。

困難なる境遇を打ち破り自力以て運命を開拓するは男児の快事也
しかもその境遇の打破り難きを覚悟し、優々として笑つて運命の
支配の下に服するはさらに男児の快事也。人の貴きは目に見えた
る成功にあらず、只だ成功すべき人格を具えながら、時の非にし
てわれに可ならざるを知り、泰然として運命の手に服従する点に
(註23)
あり

赤羽は、この通信のように、境遇の打ち破り難きを覚悟し悠々と
笑つて運命の支配の下に服するのではなく、運命に挑戦する社会主
義の道をとつたのである。

日本人柔港社会党が組織されてから一年二ヵ月たつた明治三十八
年（一九〇五年）五月、赤羽は故国の母が重い病氣になつたという知
らせを受けた。彼は母の病床にもどるために、二ヵ月近くの労働を
して、この年の七月八日にサンフランシスコを出発、七月二十五日
に横浜に上陸した。故郷には七月三十日に帰つた。母は癌により十
二月十三日、不婦の客となつた。母は赤羽にとつて実に唯一の隠家
であつた、また唯一の愛であり、唯一の希望であり、唯一の光明で
あつた。彼のすべてであり、善良かぎりなかつた母を殺したのは誰
であるか。それは善良な母に正当に相應に幸福をもつて報いなかつ
た社会であると彼は考えた。母への不幸のお詫びは生前母を悩まし
た社会に対して復讐することであつた。復讐の信念によつてそれか
ら以後彼は生きるようになった。(註24)この復讐の武器としたのが「社会
主義」であつた。明治三十九年（一九〇六年）四月一日、上京して日

本社会党に入党した。明治四十年（一九〇七年）一月十五日、日刊
『平民新聞』が創刊されると、赤羽は平民社に入社して、紙上に筆
をふるつた。

日本社会党が禁止され（明治四十年二月二十三日）、日刊『平民新
聞』が廃刊（四月十四日）すると、しばらく郷里に帰つたが、五月二
十五日、『京都日報』主筆として京都へ赴いた。しかし、京都にも
長くはいなかつた。その年の秋、九月十八日には西川光次郎の要請
で議会議派社会主義者の機関紙『社会新聞』の編集員となつた。

議会議派が片山潜派と西川光次郎派とに分裂すると西川は赤羽ら
と共に『東京社会新聞』を明治四十一年（一九〇八年）三月十五日に創
刊した。この新聞の第十三号（明治四十一年七月二十五日）に掲載し
た「社会党入獄史」で筆禍を受け、彼自身も入獄することとなつた。

明治四十二年（一九〇九年）九月二十四日、一年間の獄中生活を終
えて赤羽は再び社会主義者の中へもどつていつた。しかし、同志と
考えの相違がはつきりすると、十一月二十八日郷里へ帰り、生家に
ひきこもつて『農民の福音』の執筆に専念した。『農民の福音』が
印刷されたのは明治四十三年（一九一〇年）五月二十二日、発行は五
月二十五日となつてゐる。しかし五月二十一日にはでき上つてお
り、彼は内務省に出版届を出す前に、同志にひそかに頒布した。こ
れは「農民の福音」が発禁されることを予想して発行日付をずらし
たのであつた。しかし、このようにして同志に配布する計画はスバ
イの密告により失敗し、官憲に追われることになつた。尾行をまい
て一時行方をくらました。静岡で捕えられ六月九日東京に送られ

た。千葉監獄に移送されたのは十一月五日であつた。獄外では「大逆事件」の嵐が吹きまくつていた。赤羽は『農民の福音』を出版するに際し、入獄して獄死を予想していたようである。明治四十四年(一九一一年)春頃より腸カタルが悪化したのが、看守のすすめる医薬も受けつけず、ハンガー・ストライキをやり、獄死した。明治四十五年(一九一二年)三月一日であつた。三十七年の生涯には、なお二ヵ月ほど足りなかつた。赤羽の一生は、自らのハンストにより絶たれたのである。^(註26)

註(1) 英匡社は千名を超える社員を擁した民権政社であつた。赤羽無事もこれに加盟していたことはその名簿、会計簿により明らかである(有賀義人・千原勝美編『長野県自由民権運動・英匡社資料集』〈信州大学教育学部松本分校英匡社研究会 昭和三十八年十一月〉一三三頁・一二七頁等)。

- (2) 『窮冬漫語』(『光』第三十一号 明治三十九年十二月二十五日)
- (3) 『母を哭す』(『光』第五号 明治三十九年一月二十日)
- (4) 『啼血物語 上』(『警世』第十九号 明治三十四年六月二十五日)。なお、この『啼血物語』上・下は後に『嗚呼祖国』の附録に「吐紅記」と改題して、ほぼ完全な形で収録されている。
- (5) 『嗚呼祖国』(明治三十七年一月再版 一二三館 十二三三頁。初版は明治三十五年八月、鳴鳳書院より出版された)。
- (6)・(7) 右同書四十四頁。
- (8) 右同書十五頁。
- (9) 『内村鑑三先生に呈す』(『東京独立雑誌』明治三十二年四月二十五日)

- (10)・(11) 右同。
- (12) 『病院の朝』(『日本人』百二十七号 明治三十三年十一月二十日)
- (13) 前掲『嗚呼祖国』二十七頁。
- (14) 右同。
- (15) 『巖穴囁語』(『日本人』百七十四号 明治三十五年十一月五日)
- (16) 前掲『嗚呼祖国』十頁。
- (17) 前掲『母を哭す』
- (18) 『乱雲驚濤』(『明治文学全集 第八十四巻』〈筑摩書房 昭和四十年十一月〉三二九頁)
- (19) 前掲『嗚呼祖国』百二十一頁。
- (20) 『社会主義』第八年第六号(明治三十七年四月三日)に掲載されている片山潜の「米国だより」(第七信)では「日本人桑港社会党」とあり、岩佐作太郎の「在米運動史話」には「桑港日本人社会主義協会」とある(社会文庫編『在米社会主義者・無政府主義者沿革』〈柏書房 一九六四年九月〉五二四頁)が、ここではこの団体が組織された時期に最も近い文書から「日本人桑港社会党」をとることにする。
- (21) 一九〇三年六月八日付、赤羽の弟宜十宛の通信(西田勝「新資料から見た明治社会思想」(4)〈『東京大学新聞』昭和三十三年九月十八日 三〇四号〉)
- (22) 一九〇三年九月三十日付、赤羽より弟宜十への通信(西田勝「新資料から見た明治社会思想」(5)〈『東京大学新聞』昭和三十三年九月二十五日 三〇五号〉)
- (23) 一九〇五年二月二十六日付、赤羽より弟宜十への通信(西田勝「新資料から見た明治社会思想」(6)〈『東京大学新聞』昭和三十三年

年十月二日 三〇七号)

(24) 前掲『乱雲驚濤』(前掲書三一九頁)

(25) 議会主義派の分裂の原因は、実は赤羽にあつた。この頃、赤羽は幸徳秋水のとなえた直接行動論の支持者であつたが、西川の要請で『社会新聞』に入社したのである。片山潜は、赤羽を入社させたことが失敗であつたと後につきのよう記している。「私はこの時、重大な失策をやつた。それは、一緒に運動していた同志西川に、彼の友人、赤羽(二)を我々のグループに入れるように口説かれたことである。赤羽君はアナキストだということがわかつた。彼は同志西川の友人であつたので、同志西川はいつも赤羽君の肩をもつていた。これは、我々の間の政策問題に関する絶え間ない軋轢と論争との原因となり、そして遂に完全な決裂に終つた」(片山潜『日本における労働運動』、片山潜著作集第一巻)へ片山潜生誕百年記念会、昭和三十四年十一月)所収三六〇—一頁)

(26) 赤羽の生涯については松尾貞子「明治の社会主義者赤羽巖穴の思想と行動」(『日本近代史研究』7、昭和三十九年十一月)および渡辺悦次「年譜・赤羽一(巖穴)」(前掲『明治文学全集』第八十四卷 四四〇—一頁)によるところ大である。殊に松尾論文に負うところが多い。

二、功名富貴欲

赤羽の功名富貴を求める欲望は人並以上であつた。それは「正義」を伴う功名であり富貴であるとされたが、その欲望はすさまじいものであつた。この功名富貴を求める欲望は、裏返せば、それが

手に入らないということであるから、したがつてここから社会や國家に対する不平不満は彼の功名富貴欲に正比例して大なるものになつていつたとしても不思議ではない。このことはまた、すでに特権の座にある政治家、金持階級、貴族、実業家等に対する憎悪となり、現存社会体制への批判、日本への怨恨となつて発展していくことになる。

つまり問題の出発点は「功名富貴」欲である。これが彼の生活の中で獲得できたら問題はないのであるが、それが達成できないとすると彼の欲求不満は二つの方向に爆発する。一つは功名富貴を得られない自分の非力、胼甲妻なさを自ら責める内面的な方向に向い、これが自己否定・自殺という方向を決定する。渡米前の赤羽は、この自己否定の要素がかなり大であつた。それが渡米を境として欲求不満が社会主義という誘導管を発見して、自己より外へ向う社会否定、革命へと転化する。この路線は母の死によつてさらに決定的となる。以上のことを念頭において、赤羽の行動を決定した功名富貴欲を見ていこう。

明治三十三年を送り、明治三十四年を迎えるにあたり、赤羽は、自分のごとき正直の士をして窮途悲境に陥らしめ、散々に痛恨、流涕せしめた爾明治三十三年は速かに去れ、そして明治三十四年の新天地をもつて、自分の最後の飛躍を試みる舞台となさん、といつた。^(註1)この文の前には、七年都門の風塵に没頭して、身は依然たる呉下の旧阿蒙、碌々たる馬駒のみ加えてきた、年の逝くを傷むのではないが、志の為らざるのを傷むのだとある。此の頃、彼は「天下第一流

の士」となることを望んでいた。現実の彼は、半生の志望徒らに浮漚にして羶身鶴の如く、満肚の熱血灑ぎつくして只空しく世路の罅隙に泣くに過ぎない身であつたが、「而かも吾人の志は常に天下第一流の士たらんことを忘れざるなり、天若し吾人に仮すに今後十年の星霜と運命とを以てせば、希くは天下第一流の士と為つて甘心するを得んかな」といつた。

前節でも述べたように、彼がアメリカへ渡るのも、「燃ゆる様な僕の功名心」からであつた。東京法学院に学ぶために上京してから八年間の不遇、失意、混頓、蹉躓等のあらゆる血と涙の爛斑している歴史を門途の犠牲となし、断ち難い情実や肉親の愛を振り切つて万里遠征の雄図を企てたのである。東京遊学の時に彼の胸中にあつたことは、「他日功成り名遂げた暁には蘇秦ならなくも六韜の金印を胸間に輝かして郷党の奴等を蒲伏跪拜させ、大地に顔を擦り着けて泥でも舐らしてやる意気込であつた」のであるが、現実の彼は人生の失敗者、青雲の梯昇り損ねた落武者、生存競争に負けた不適者として「誰れ一人相手にしてくれない憐れな境遇に陥つた」のである。それでも雄心なお止まない彼は最後の大飛躍を試みるために埋骨の青山を北米の広野に求めんとして渡るのであつた。

これほどまでに功名富貴を求めるのは、何故であるか。それは父母の名を顕わし、往昔盛んであつたが今日は零落してしまつた家運を復興させるためである、と彼は説明する。

放浪十年、我れは徒らに世塗の風塵に老いんとはするなり、徒ら

に世塗の風塵に老いんよりは、寧ろ飯つて故山に母の奉養に侍せんか然れども我れに負陽の名なきを如何せん、我れに王侯の富なきを如何せん、我に故郷に飾るべき錦なきを如何せん。今にして帰る、子は子の家名を汚さんを恐る、子は子の父祖の名を辱めんを恐る、子は子の老親をして余の魯鈍に泣かしめんことを恐る、一身の恥辱は尚お忍ぶべし、一身の弊緇袍は尚お堪うべし、但夫れ父祖の名を辱め、子の家名を傷け、子の老親をして堂に泣かしむるに至つては、子胡んぞ愧び得んや^(註6)

によつてもわかるように、功名富貴は家名をあげ、老親(母)をして安心させるために必要であると考へたのである。

余が既往半生の努力、奮勉、刻苦は皆母の為めなりき、功名富貴に対する熱烈なる渴望、爵位権勢に対する無限の希求、此等は皆母の為めなりき、即ち母の安心を得ん為めなりき、母の満足を買わん為めなりき、偽りならぬ母の眞の笑顔と歡喜とを買わん為めなりき^(註7)

以上によつて赤羽が功名富貴を求める根源がはつきりする。彼の文字をそのまま信ずることにすると、それは家名をあげたところに発し、とりわけ母を安心させ喜ばせたいところに理由があつた。彼は、求めるものを獲得しなくてはならないのだが、それは「痴人」にでもならなければとうてい望めないのであつた。彼は自分を、濁界に容れられるには余りにも清く、腐敗社会に眼を瞑ぐには

余りにも正しく、俗人と和楽するには余りにも偏狭である、と評した。^(註8) かくのごとく偏狭にして交友の道を知らず、狂愚にして俗流と推移することをなさず、矯々自ら高しとなし、毫も世態変通の妙を解しないようでは、功名富貴は望んでも無理なのである。なぜならば、彼の見るところによると詐欺、偽善、腐敗、墮落を苦痛と思わぬようではなくては成功はおぼつかないからである。彼の性格と信条は、このような成功をもたらしすべき条件を完全に欠いていた。彼は、古い封建時代そのままの武士道ではなく、広く国民一般に応用すべき剛明正大の気象としての「武士道」の必要性を説いている。すなわち營々逐々日夜衣食という物質的欲望だけに奔走している時勢に、一道の生氣凛々たる武士道を注入して、勇氣、義氣、俠氣ある国民たらしめんとするところに目的をおいていた。^(註10) 要するに、彼は、極端な、偏狭な、頑固な、不自然な、附会な思想と自ら称した思想を縦横しているかぎり功名富貴はとうてい望めないのである。^(註11)

彼の性格にして功名富貴は望めないとすると、彼はいかなる道に転進したらよいか。

男児生きては声誉の衡に立ち、功名万代を蓋い、死しては宝幢玉帙大理石の墳下に逝く能わずんば、寧ろ虎行狼心、世を乱り人を苦しめ嫵然哄笑して断頭台の上に昇らんには如かず。^(註12)

という文字の中に、彼の方向が予言されていないであろうか。功名富貴を得られなければ断頭台の上に昇らんと書いた十一年後に、彼

は獄中で自ら命を絶つたのである。

赤羽の功名富貴を望んでも得られぬところから爆發する欲求不満は二つの面にあらわれるわけだが、その一つの自分を責める面は前節で自殺を幾度か企てたという説明ですんだとしよう。いま一つの欲求不満の捌口である社会批判について見ていこう。これが「断頭台」獄死への道に通ずるからである。

特権的な地位を獲得している政治家、実業家、商人、貴族や、そうしたものゝ安住させている社会体制に対する赤羽の批判文は枚挙にいとまがない。

赤羽は、当時の社会を評して、乱雑にして秩序なく、綱紀なく、人はただだ私利私栄、獸慾にのみ耽つているとした。なぜにこのように社会が腐敗したかというところ、明治維新と共に、徳川三百年の時代に精神を支配してきた儒教的国民道徳が打ち破られ、これにかわる鞏固なる国民道徳が固まらないうちに実利主義という外国の倫理思想が入ってきたからである。この実利主義は物質主義ということであり、これは拜金主義ということでもある。これが私利私慾を生み、^(註13) 社会の秩序を乱すようになるのだ、と赤羽は考えた。

このような社会にあつて、真に正直に自己の額に汗してパンを求めているのは農夫、労働者、車夫、立ん坊であり、^(註14) 他は盜賊である。專制君主は人民の自由人權を僭み、政府は人民の膏血を盜み、有司は國家の公財を窃み、官吏は國家の租税を盜み、富豪は細民の財囊を盜み、^(註15) 資本家は労働者の報酬を盗んでいるのが今日の社会である、と赤羽はいった。

このように日本の社会組織はきわめて不完全である。それは働く者から奪つて遊んでいる者に与えている。貧しき者を空虚にして富める者を満たしている。富豪という貧民の血を吸う鬼を造り、資本家という労働者の肉を喰う獣を造り、貴族という懶獸を造つている。^(註16)

このような富豪や貴族というような奴輩には鉄拳をもつて横面を頭と喰らわしてやるがよい、また熱烈なる感情の烈火を燃して彼等を片つ端から焼払つて仕舞うがよいのだ。^(註17) このように憎みてもあまりある貴族、富豪を存在させる「日本国及日本人」に赤羽の非難は浴びせられるが、それは日本国と日本人が彼に加えたという、あらゆる圧制、横暴、迫害、鞭撻に対する罵りであり不平であり鬱憤^(註19)である。その日本と日本人に対する憤りの書が『嗚呼祖國』である。この本くらい、日本を悪く言つてゐるものはないと当時批評されたのが『嗚呼祖國』である。^(註20) この批評子は赤羽を「熱狂青年」と評したが、別の批評をした赤羽の友人は、赤羽の思想を「健全なりや、將た病的妄想なりや」と言つた。熱狂といわれ、病的妄想といわれるほどに赤羽は日本を罵倒したが、それは他国人が日本を非難するのとは違ふ。彼は自ら「最も忠実なる愛國者」^(註22)と言つた。島田三郎が言つたように日本への罵倒は祖國を懐うのあまり、憂世の至情より出るものであつて、そうでなくては「祖國」などという文字を冠するはずがない。^(註23)

國を愛し、憂える至情からにせよ、彼の国家、社会、体制への批判の前半生の総まとめともいえる『嗚呼祖國』は「頗ぶる社会主義に接近」^(註24)していることを示した。機会さえあれば、すぐにでも社会

主義陣營に参加するところまできていた。

註(1) 『黒面放語録(四)』(『日本人』明治三十三年十二月二十日 第百二十九号)

(2) 『餘憤餘言』(『日本人』明治三十四年四月二十日 第百三十七号)

(3) 前掲『嗚呼祖國』八頁。

(4) 右同書十一—十二頁。

(5) 右同書十二頁。

(6) 前掲『啼血物語 上』

(7) 前掲『母を哭す』

(8) 『熱吻狂情録』(『日本人』明治三十四年三月二十日 第百三十五号)

(9) 前掲『餘憤餘言』

(10) 『紛々録』(『武士時代』明治三十五年七月二十日 第一卷第五号)

(11) 前掲『嗚呼祖國』百三十頁。

(12) 『寒燈録』(『日本人』明治三十四年二月二十日 第百三十三号)

(13) 『少壯覚悟の時期』(『日本人』明治三十四年九月五日 第百四十六号)

(14) 『感餘録』(『日本人』明治三十四年九月二十日 第百四十七号)

なお、赤羽は『感餘録』という同じ題で明治三十四年に八回『日本人』に執筆しているから、何号の『日本人』の『感餘録』なのかが大切である。

(15) 『口法三三滴』(『日本人』明治三十四年十一月二十日 第百五十一号)

(16) 前掲『嗚呼祖國』四十三—四頁。

(17) 右同書七十七頁。

(18) 右同書一頁。

(19) 右同書四頁。

(20) 「近頃日本を悪口する書物が続々出来るが、此の書位、思い切つて言つて居る者はない、而かも此の書は唯だ罵詈を極めて居るのではなく、文字の中に人の子の血が流れて居るから、此の書を読むものは誰でも、一熱狂青年赤羽君を眼に見る心地がするであらう」

(『労働世界』明治三十五年九月十三日)

(21) 「子が思想の健全なりや、將た病的妄想なりや如何は『日本人』の読者は皆善く之を知らん也、子が文章に巧みなるは余之を知る、然れども其文章に見るる所の思想は余其健全なるや否を疑う、『嗚呼祖国』の一書の如きに至ては若し余ならば寧ろ之を刊して世に公にするに躊躇す」(『日本人』明治三十五年十一月五日 第一百七十四号)と評したのは、赤羽を『日本人』に寄稿させることに好意をもつた友人香川香菴であつた。なお、香川は、赤羽は米國をもつて自由平等の衆土と考えているが、決してそうではなく、そのような考えをもつて、「此の土に渡航せば、得る所蓋し失望と懊惱なるならんや」と附加し警告している。

(22) 前掲『嗚呼祖国』五頁。

(23) 右同書に寄せた鳥田三郎の「序」

(24) 『六合雜誌』明治三十五年九月十五日。

三、社会主義への道

明治三十五年八月に出版された『嗚呼祖国』が「頗る社会主義に

接近」しながら、社会主義について一言も触れられていないというのは全く不思議なことである。一年三ヵ月前には社会民主党が創立されようとして禁止され、世人の注意を深くしたはずである。^(註1)安部磯雄を中心とする社会主義者が社会主義協会を作り、社会主義の啓蒙宣伝活動を演説会や『労働世界』^(註2)紙上を通じて行つていた。彼は社会民主党も社会主義協会についてもよく知つていた。社会主義協会は社会民主党として現われ、社会平民政として現われたるものの変態である、政府が政社組織を禁圧するからここに非政社組織となつて現われたのである、「真理は必ず到達せずんば已まず、吾人は切に諸氏の発憤努力を祈らずんば^(註3)あらず」と評したのは、『嗚呼祖国』発刊の丸一年前である。赤羽は、このように社会主義者達の活動を知りながら、自らは社会主義について触れず、社会主義者「諸氏の発憤努力を祈」るだけであつたというのは納得し難い点である。

『嗚呼祖国』は、「多感多情」「正直潔白」「偏狭狷介」「狂愚才劣」等のために立身出世のコースから外れて社会からはみでていかざるをえないで、痛烈な社会呪咀や「祖国」批判になつたものである。幼稚で感傷的な面もあるがナイーヴでアイロニカルな文体で、なぜ日本を去つてアメリカに行くか、をめぐりながら自己告白と社会批評が語られるというスタイルをとつている。^(註4)たしかにそれは社会呪咀であり祖国批判であるが、社会主義の存在を知つていた赤羽にしては社会主義について全く触れない社会批判である。

社会主義者に発憤を促し、あるいは「嗚呼世の多くの犯罪は、多

く胃の腑の欠乏より来る、多く生活の担保なきより来る、殊に病弱者に対する生計の救済なきより来る。希くは世の識者よ、社会主義者よ、乞う此事件に就て須らく熟考する処あれよ」と^(註5)というところは社会主義者に対して全く第三者の立場に立つているように見える。赤羽が社会主義にこのように冷淡であり得た理由はなんであろうか。

その一つとして「社会改良家とか、人道の戦士とか、鉅毒問題熱心家とか社会主義の鼓吹者とか言われる輩も」つまりは名利を追う者に過ぎないという彼の批判が理由にあげられてよいだろう。赤羽のこの批評が間違っているというのではない。たしかに名利を追う社会改良家、人道の戦士、社会運動家、社会主義者はいるであろう。しかしながら、赤羽が理想とした正義を伴う功名というものが、もし存在するとしたらそれはやはり社会改良家、社会主義者等に求める外にあるまい。それまでも名利を求める者といつて拒否したならば、功名富貴を獲得するために生きている彼自身の存在理由を全面的に否定することになる。そしてまた彼自身「鉅毒問題熱心家」を名利を求むる者として批判^(註7)している前後に、この鉅毒問題を彼自身が論じている点も不可解である。そこにおいて彼は、鉅毒被害者は人民といつても、じつは一富豪の奴隷である、名は立憲治下の民といつても、じつは明治政府の支配に関係なき治外の民なり、彼等は無情なる政府と残忍なる同胞の間に介在して日々死地に近づきつつある、「起てよ人道の士。出でよ菩薩漢」という^(註8)名利を追う鉅毒問題熱心家と「人道の士」「菩薩漢」とはどこで矛盾なく統一されるであろうか。このように追求してみると、彼が社会主義者の陣

営に参加しなかつたのは社会主義者も名利を追うからだ、という理由は成り立たないことがわかる。社会主義者の活動を知り、彼の思想が頗る社会主義に接近していながら社会主義に冷淡であつたのは別に理由がありそうである。

そこで第二の、そして決定的な理由として考えられることは、家名をあげ富貴を得たいという執着が、彼を社会主義に踏み切らせることを躊躇させたのではなかつたか、ということである^(註9)。したがつて、「自由の天地」アメリカへ渡つても、生活が不如意で日本同様に功名富貴は望めないとわかつた時に、はじめて「社会主義者」になりきつたのである。

赤羽はアメリカで社会主義者になつたが、その前に彼は熱心なる非戦論者であつた^(註10)。赤羽は大のトルストイアンで、熱心な非戦論者であつた^(註11)。片山潜がサンフランシスコにきて、社会主義演説会を開催した時、赤羽は「新世界」で非戦論を展開していたのである。

片山の来訪の結果生まれた日本人乗港社会党は活動らしい活動は行わず立消えになつた。三十八名で組織された党は一人去り、二人去つて、ついに赤羽と岩佐作太郎だけとなつた。最後まで残つた赤羽は、幹事の責任から非戦論演説会を開催することを岩佐と計り、対岸のオークランド市の日本人社会主義協会の応援を得て、赤羽らの組織の第一声をあげた。非戦論演説会はその後も度々行われたようだが、赤羽も「平和攪乱者へ誰ソ」と題して次のような演説をしたことが日本政府の極秘文書に記録されている。

日露間ノ平和ヲ攪乱シテ戦争状態ニ至ラシメタモノハ誰ナル乎日本側ノ人ハ即チ曰ク露国ナリト左レト所謂漠然露国ト云フハ露西亜皇帝ヲ指スカ聞ク「ツアー」、極メテ意志弱クシテ多クノ場合ニ於テ皇后ニ支配セラル彼ノ和蘭「ヘーグ」ニ開カレタル万国平和會議ノ發議ノ如キハ正ニ皇后ニ動かサレタル結果也故ニ戦争ノ如キモ他ノ悪臣ノ為メニ制セラレ止ムヲ得スシテ起スニ至リタルモノ然ラハ「ツアー」ハ戦争ヲ起シタルニアラスシテ其下ニアル野心家カ起シタルノミ又タ齟齬ヲ露西亜側ヨリ日本ヲ見タル説ハ戦争ハ露国政府ニ非ス日本カ之ヲ起シタルニヨリ止ムヲ得スシテ之ニ応スルノミト云フモ倭其ノ日本ト云フハ日本天皇陛下下ヲ云フカ陛下ハ一視同仁ニシテ決シテ戦争ヲ好マス然ラハ日本ノ国民カ否々国民ハ何事ヲモ知ラス結局戦争ハ野心アル政治家富豪上級ノ軍人功名心ヲ以テ滿チタル新聞記者輩ニヨリテ起サレタ(二字不明)〇〇憐ムヘキハ一般下級ノ軍人ト国民トナリ彼等ハ一部少数野心家ノ犠牲トナツテ其ノ心血ヲ絞リ其ノ生命ヲ擲チツ、アリ此点ヨリ見レハ我等ハ戦争ヲ非トスルト同時ニ暗殺ヲ是トス何トナレハ戦争ハ野心家カ他人ヲ犠牲トスルモノナレトモ暗殺ハ直ニ其ノ野心家ヲ殺スモノナレハナリ云々(註13)

日露戦争中、サンフランシスコやオークランドで非戦運動は演説とペンをもつてかなり行われたはずであるが、赤羽の右の演説だけが報告されているのは、彼が在米日本人社会主義者の中で特に注意されていたからであろうか。赤羽や岩佐は「筆に口に、生硬な社会主

義を説き、非戦論を叫んだ。そしてしまいは演説会場も新聞紙面も貸すものがなくなるに至つたのである。然かも新聞という新聞は私たちに冠して不忠、不義の標本、乱臣賊子であると言うことをやめなかつた(註14)」のである。赤羽は片山によつて日本人桑港社会党の幹事にさせられた時は「社会主義は分らない」と言つていたが、非戦運動を展開している中に自ら社会主義を説くようになった。そして片山がサンフランシスコにきた時から半年後に書いた故国の弟への便りには「よし帰郷したればとて一家を相続する身分には無く、寧ろある主義の爲めに献身して奔走せねばならぬ境遇に有之候間云々(註15)」といつて、社会主義運動に献身したい決意をはつきりさせている。

赤羽は、以上見てきたように渡米中に社会主義者となつたが、この彼の立場は母の死によつて不動のものとなつた。唯一の希望であり、光明であつた母を失つたということは生きる目標を失つたということであつた。彼が母の死後も生きていくためには、別の生きる目標をかかげなくてはならなかつた。彼は新しい目標をかかげた。それは「社会主義」であつた。

多謝す社会主義、若し余にして汝を信ぜざりしならば余は疾く既に母の後を追うべかりし也、母の死に依りて絶望の微光を仰がしめたるものは汝也、母の死に依りて有てる総てを失いたる余の活ける屍骸に復活の光明を与えたるものは汝也、救世済人の大主義の上に立ち、時運の非に反抗して余のあらゆる力を以て此悲惨なる人生と健闘せんとする勇氣を与えたる者は汝也、汝は実に我再

生の恩人にあらずや、復活の救主にあらずや^(註16)

彼の功名富貴を求めた前半生はここに終り、人類一般のためにさらに新たな義務の念に生き返つたのである。^(註17)すなわち彼は社会主義者となつたのである。社会主義者となつた頃の赤羽は全身炎となつて浮世の中を駆けまわり、身にふれるものをすべて焼きつくさんとした。五人や十人を殺す剣や百人や千人を殺す爆裂弾では彼の気は安まらなかつた。願ひは地球を黒熱焦土と化す天の靈火となることであり、地上のすべての物を崩壊しつくす地震となることである。^(註18)

註(一) 山路愛山「現時の社会問題及び社会主義者」(『明治文化全集

第六卷』日本評論新社 昭和三十年十月)所収 三三三頁)

(2) 『嗚呼祖国』が発刊された翌月にはその紹介が『労働世界』に掲載されたことは前節で見た。その紹介文の掲載された号には赤羽の「黄金以上のもの」(明治三十五年九月十三日)という短文が掲載されている。

(3) 『警世』明治三十四年七月二十五日号の「内外時評」欄。

(4) 西田勝「明治ナシヨナリズム変容の輝かしい記念——巖穴の『嗚呼祖国』について——」(『講座日本近代文学史のしおり』1)大月書店 昭和三十一年十月)

(5) 前掲「感餘録」(『日本人』明治三十四年九月二十日)

(6) 「零丁語」(『日本人』明治三十五年四月五日 第百六十号)

(7) 「毒原跋渉記」と題し五回「日本人」に論じている。その「上」を百五十五号(明治三十五年一月二十日)、「中の上」を百五十六号

(同年二月五日)、「中の中」を百五十七号(同年二月二十日)、「中の下」を百五十八号(同年三月五日)、「下」を百五十九号(同年三月二十日)と論じてきて、さらに「鉱毒問題三論」と題し同誌百六十一号(同年四月二十日)に論ずるといふ熱心さである。

(8) 右掲「鉱毒問題三論」

(9) 松尾貞子氏は「家名や肉身への執着を絶ち切つてまで、自己の信念や思想を貫くことはできなかった」(前掲「明治の社会主義者赤羽巖穴の思想と行動」と言っている。同感である。

(10) 松尾章一「明治末期における在米日本社会主義・無政府主義運動小史」(前掲『在米社会主義者・無政府主義者沿革』所収 一七頁)

(11) 前掲若佐「在米運動史話」(右同書 五二―五頁)

(12) 「僕(赤羽のこと——中村註)には社会主義は分らない。だがあの場合、僕が新聞社にいるところから幹事を押しつけられた。僕はドモリで口下手なところから断り切れなかつた。今となつてはその責任は取らぬわけにはいかぬ、出来るだけの責任は果たすつもりだ。然かも非戦論は天下の大義だ。これを主張しなくてはならない」(右同)といひ、赤羽は非戦論演説会を強引に開催した。

(13) 「米國ニ於ケル日本人社会主義者無政府主義者沿革」(右同書 四五―六頁)

(14) 前掲若佐「在米運動史話」(右同書 五二―六頁)

(15) 一九〇四年九月三十日の宜十への通信(前掲西田勝「新資料から見た明治社会思想」(5))

(16) 前掲「母に哭す」

(17) 右同。

(18) 「熱火冷火」(『新紀元』明治三十九年八月十日、第十号)

四、赤羽の社会主義思想

石川三四郎は赤羽を評して次のようにいつた。赤羽は常に慷慨悲歌して心平かならず、あたかも噴火山のまきに爆發せんとする前兆を示すが如くであつた。殊に、赤羽は政治と政治家とを憎むこと蛇蠍の如く、したがつて思想は早くからアナキスチックであつた。^(註1)

石川の右の評言は、これまで見てきたところでも明らかなきことであり、このことはまさに前節最後尾において見た炎となつて地球を焼きつくしたいという点で鮮やかに証明されていると思う。ところが彼はなぜに全地球を炎で焼きつくしたいというのであろうか。

赤羽は国家についてつぎのように考へた。すなわち国家は一つの大きなピラミッドである。労働者階級を礎石として、その上に幾層々の権力階級を積み重ねた壯麗なる一大三角塔である。土台石である平民階級は上から圧せらるる重力に耐えずして、苦叫し、啼泣し、悶死しつゝあるにかかわらず、此のピラミッドの最高点に踏み跨がり傲然として四方を睥睨しつゝある王、貴族、富豪がいる。このように今の国家は王、貴族、富豪等の共同園圍である、今の政治は王、貴族、富豪の三頭政治である、そしていまの国民は王貴族、富豪の小作人であり、婢僕であり、園丁であり、奴隸なのである。^(註2)

マルクスとエンゲルスは、労働者には国家はないから労働者は彼自身の国家をつくらなくてはならない、といつた。まづたく今日の国家は我々労働者の国家ではなく、それは金持や地主の国家である。だから、労働者階級はまず第一に今の国家に対して「我が愛する国

家よ」と呼び得る資格をつくらねばならない。その資格をつくるためには、政治上の実権を我々労働者の手に獲得しなくてはならぬ。^(註3)

この王、貴族、富豪の共同園圍であるような国家を廃止して政治上の実権を労働者の手に獲得しないかぎり労働者の解放はなく、自由の天地はないというのであるが、自由の天地とはいつたもののようなものであると赤羽は考へたであらうか。彼によれば、それは君主無き社会、貴族無き社会、富豪無き社会、人が人を利用しない社会であるという。こうなつて人ははじめて完全円満なる自然の性情を遂げることができるといふ。^(註4) この考へを農村の革命という面において發展させたのが、つぎのような「無政府共産」の思想である。

すなわち、我々は土地泥棒を革命の断頭台上にして、我々の遠い祖先が樂しみたる「村落共産制」の昔に還らねばならぬ。村落共産制の骨に、科学の最高智識と、相互扶助の最高道徳の血と肉とを融和したる「無政府共産」の自由安樂郷を造らねばならぬのである。^(註5) 万人共樂の自由郷、これ必ずしも夢では無い、最大多数の最大幸福、これ必ずしも幻ではない。万人が共同に所有し、共同に労働し、共同に生産し、共同に分配し、共同に和樂する「無政府共産社会」の実現は断じて夢ではない。^(註6) 以上が赤羽の未来社会へのビジョンであつた。

次に問題にされねばならぬ点は、労働者が奴隸以外の何ものにもなれないような現在の国家を廃止して労働者の理想社会にもつていく方法如何ということであらう。赤羽は、現存国家に対する認識ではペンをとるようになってから生涯を終えるまで大きな変化はなか

つた。未来へのビジョンの点では、王、貴族、富豪無き社会という表現から無政府共産社会という表現へと変化しており、それだけに後になるほど思想が明白なものになつてゐるわけだが、その両者の間には共通点もある。しかし、事、改革の方法となると大きな変化をしている。先きに見たように、彼は炎となつて地球上の全てのものを焼きつくしと言つたし、また「暴力には暴力を以てせよ、爆裂弾には爆裂弾を以て酬いよ、虐殺には虐殺を以て報ぜよ」と時には言つた。しかし、これらの文字は、それほどに現体制、現存秩序を憎悪していたというものであり、これで改革なり革命が出来る

と彼は考えていたわけではない。

赤手空拳の労働者階級の戦術として赤羽は、まず労働者の団結を説いた。労働者階級は倦まず焦らずに、あくまでも強い決心と、堅い忍耐をもつて、遠廻しに一歩々々資本家に肉薄することである、^(註8)労働者階級の武器は、鞏固なる団結と兄弟主義に基く協同である。

これは第二回日本社会党大会以後の発言である。彼は第二回大会で幸徳派に属し、直接行動論支持の一票を投じていたが、運動の方法に対する考えはこのように堅実であつた。右の発言から八ヶ月たつた後も、なお労働者は自らを解放させるために組合や政党という形で団結せよ、政權獲得のためには普通選挙運動がある、これらの武器をさびさせないようにし、これを執つて資本家階級を降服せしむべきであると説いた。^(註10)明治四十一年(一九〇八年)一月になつても、なお、特権階級に奪われた社会を一挙にはなくとも、ぼつぼつ取り返すことに反対する理由がないと部分的改革の積み重ねを説いて

いるのである。^(註11)

一方において直接行動を支持している赤羽が他方において部分的改革、つまり漸進主義を説いているのは矛盾しているように見える。これを理解するには、「自分は元來直接行動論者である、けれども自分が直接行動論者であるからと言つて他の議会政策を全然有害無益なりとする程自分は狭量でない、自分の主義は主義として、実地問題に於ては少しでも労働階級の利益になる事なら何でも頭を突つ込んでやらねばならぬと信じて居る。僕は議会政策でも社会政策でも、労働者夫れ自身の団結の力にてやる事なら何でも直接行動であると云う意見である」^(註12)という赤羽の言葉を一応念頭に置くのもよいだろう。後述するように、赤羽には運動を發展させるためには小異をすてるという面もたしかにあつたから、この言葉も重要である。

しかし明治四十年の末には無政府主義的な記事を書き、社会主義者は憲法を利用して労働者の利益を図るなどということは口にすべきではないという赤羽と、議会議主義を唱へ憲法利用論を主張する片山潜との間に激しい対立が再三あつた。^(註13)それにもかかわらず文字の上では無政府主義的な色彩を出さなかつたのは議会議主義派の週刊『社会新聞』の主張に合わせたからであらう。このように理解すると、彼の信念と発言との矛盾が理解できるのである。

理由は二つあつたにせよ、とに角、この段階では議会議主義的改良主義を主張していたが、『農民の福音』においては完全に無政府共産主義に変化している。そこには次のように論じられている。

今日国王と云う者が在つて、自分の領地の人民を支配し、其の上
に生殺与奪の権を揮うて居たり、または憲法政治と云う名の下に、
地主から選挙された代議士共が寄つて集つて、国会というスリの宿
で、自分に都合の宜い法律を造つている。道理上人類全体の共有物
であらねばならぬ土地を、不義奸悪なる地主に占有される事によつ
て起る運命には、よしんば骨が砂利になるとも、反抗せねばなら
ぬ。そしてこのような横着不屈な地主共の首を片ツ端から革命の斧
でチョン斬らねばならぬ。我等の革命運動は永い間生殺しのまま置
かれたる蛇の復活運動である。我等は蛇の如く執念深く紳士閥につ
きまとい、今度は地主、貴族、金持等をとりに押えて復讐の弄り殺し
にしないでならぬ。

それでは復讐の方法はどうか。それは農民が団結して地主に対し
て「年貢を払わぬ同盟」や「田地を借らぬ同盟」をすれば、地主は
所有田地を投げ出して諸君の前に降服するようになる。かくて地主
が投げ出した田地は、諸君が共有の手に入るのである。ここで一つ
困るのは、同盟が成功するまで小作人等はどうして生活して行く
か、何処から兵糧を得るかという問題である。しかし、そういう場
合には、地主の米は元来我が所有であるという原則に従つて、彼等
の倉庫から自由に米をもつて来て兵糧に使えばよい。地主等は素直
に渡すまいが、こちらは多数であり、かつ道理に従つてやる事だか
ら彼等に反抗のしようは無い。此の原則はクロボトキンのいわゆる
収用（エキスプロプロリユーション）であつて、社会的革命の最大武器
である。

財産私有制度に心酔せる愚人は、土地、資本の公有を主張する社
会主義をもつて不思議のスインクスの如く思うであろう。権力を讃
美する奴隷は政府、教会、国家を無視する無政府主義をもつて不
解の謎の如く感ずるであろう。しかし人間は想像し得るもの、思考
し得るものは実現し、実行することが出来るのだ。

要するに農民の解放は、無政府共産社会になつてはじめて可能
だ、ということ説いたのが『農民の福音』であつた。それは無政
府主義の思想によつて貫徹された著述であつた。名は農民解放の福
音をもたらす書だが、そこには彼が三十五年のこの世における一生
をかけてたどりついた終局の彼の革命的思想の結晶があつた。

政治と政治家とを憎むこと蛇蝎のごとく、思想は早くからアナキ
スチックであつたと赤羽を評したのは石川三四郎だが、赤羽は石川
を知る以前からアナキスチックであつた。花鳥風月を叙したものは
別として、多少とも社会批評的な文でアナキスチックでないものは
無いと言つていい位である。『嗚呼祖国』は病的妄想の思想の持主
の書と言われた位に激烈にアナキスチックであつた。それ以前の時
評、社会批評はどれ一つの例外もなくといつてよい位にアナキスチ
ックである。もし彼の生涯で多少ともアナキスチックでないものを
書いた時代があるとすれば、それは週刊『社会新聞』の時代であ
り、ここに発表した論説は『嗚呼祖国』的でもなければ、『農民の
福音』的でもない。

赤羽は生来、アナキスチックなパーソナリティをもつていたが、
そのパーソナリティの上にアナキズムの思想体系づけをしたのは

『東京社会新聞』時代の読書と研究であつた。

一、クロボトキンの『脳力労働と手工労働』を東京社会新聞第八号(明治四十一年五月二十五日)から第十号(六月十五日)まで三回連載

二、明治四十一年五月三十一日、社会主義研究会でクロボトキンの『相互扶助』につき講演

三、明治四十一年六月十五日の社会主義研究会でエルベの『非愛国主義』の大意を紹介

四、クロボトキンの『相互扶助』を「原始人間の相互扶助」として東京社会新聞第十一号(明治四十一年六月二十五日)と第十二号(七月五日)に掲載

このような無政府主義に関する研究が、それまではとかく現実の欲求不満から爆発的に、そしてどちらかというところと激情的に否定的な言動を吐きがちであつた彼に、思想的に重厚なアナキズムの体系を具備させた。『嗚呼祖国』も『農民の福音』も共に現実否定の書である。そして前書が赤羽の本能的な否定の精神をみるにはこの上ない好材料を提供してくれるが、激情的、爆発的な文字の割に重厚さに欠ける点が無いでもない。それに対して『農民の福音』は、本能的な彼の否定の精神が、理性の論理によつて構築され、体系づけられてゐる点で彼の思想の到達点を示すにふさわしい書だといえる。

註(一)『著者小伝』(共学社パンフレット第六輯赤羽一著『農民の福音』

複製版に石川が附けたもの)

- (2) 「天火人火」(『新紀元』明治三十九年十一月十日 終刊号)
- (3) 「人民」とは何ぞや」(週刊『社会新聞』明治四十年十一月十七日 第二十五号)
- (4) 「熱火冷火」(『新紀元』明治三十九年七月十日 第九号)
- (5) 「農民の福音」(『明治文化資料叢書 第五卷』所収 二九四頁)
- (6) 右同(右同書 三〇四頁)
- (7) 前掲「天火人火」
- (8) 「労働者階級の戦術」(日刊『平民新聞』明治四十年三月二十六日)
- (9) 吉川守因『叛逆星霜史』(不二書房 昭和十一年) 一三二頁。
- (10) 前掲『人民』とは何ぞや」
- (11) 松尾貞子「赤羽一の『改良と革命』のメモについて」(『法政大 学近代史研究会々報』一九六三年十二月二十三日 第十九号)
- (12) 「編輯局より」(週刊『社会新聞』明治四十年十月六日 第十九号)
- (13) 「片山潜氏除名の顛末」(『東京社会新聞』明治四十一年三月十五日 第一号)

あとがき

明治の社会主義者の中で、赤羽ほど激しい否定の精神をもつた者はいない。それはまったく病的妄想といいたくなるほどのすさまじさである。その赤羽が、社会主義運動の方法では、意外なほど現実的な一面も備えていた。

このことはすでに、主義は主義として実際問題では少しでも労働者階級の利益になる事ならなんでもやるといつて直接行動論者であった彼が議会主義、社会政策をも認めるといつた点で見た通りである。平民社解散後、日本の社会主義陣営は『新紀元』派と『光』派とに分裂した。この中であつて赤羽が希望していたことは、能うべくくばこの両者を打つて一丸とすることであつた。「余は従来基督教的社会主義と称し、若くは科学的社会主義と称し、互に相對峙して嫉視反目するの馬鹿らしく大人氣無きを感じたる者なりき。よし實際は相反目嫉視せざりしにせよ、尠くとも世界をして斯く思ひしむる事の甚だ社会主義の伝動の上に不便少らざることを憂いたる者なりき、故に若し余にして日本に留りて永く故国の同志と運動を共にする覚悟ありしならんには、余は不敏と雖も起つて此間を周旋し、両者を大同団結せしめて社会主義運動史の上に新なる機運を作らんものと思惟したりし也」^(註1)彼は、現社会の根本的病源を自覚して、これに根本塞源の大斧鉞を加えんとする者はみな社会主義者であるといつた。こういう者が大同団結して社会の病根を退治するのが目的であつて、その前に主義をめぐつて對峙するのはあまりにも大人氣ないといふのである。主義思想においてあまりにも神經質すぎたり、ヒステリーじみてきては革命家も駄目になるといつた。^(註2)思想の純粹性だけを確保しようとするとき大きな勢力に拡大することが出来なくなり、目的が忘れ去られて思想の観念的な遊戯だけで終つてしまふといふことであらう。

大同団結という目標の前に意外と融通性を示した赤羽は、即戦即

決主義をも排した。性急短慮なる革命家は無暗に焦つて革命を流産させてしまふ、保守も否だが急進も否であり漸進は神の全政略（ホールボリン）だといふ考えをもつていた。^(註3)一揆的な急進主義は彼のとらなかつたところである。それについて彼は次のようにいふ。社会主義運動をとりまく目下の状況は徒らに事を急ぎ無謀突飛の行動に出るのは不利益である。それよりは欧米において行われてゐる個人伝道を採用することの方が得策であると信ずる。すなわち欧米においてはまず社会主義の簡單なるものを紙片に記し、これを見込ある個人に配布し、やや主義を解するようになつたならば、書籍等を貸与して関心を喚起し、もつて菜籠中のものにしてしまふ、こうして一人より二人に、二人より四人というように拡大していくことである。また新聞雜誌等に対しては油断なく注意を払い、微妙なる方法によつて主義を鼓吹し、徐々に各人をしてその真理を知覚せしめたならば、我々の目標は自ら達成されるのである、といふのであつた。^(註4)

このように運動には漸進主義を最上とし、慎重であれと唱へたのだから、自分の生命についても細心の注意を払うべきだつたのであるが、彼は自ら生命を絶つたのであつた。『農民の福音』を秘密出版した時、赤羽は投獄と獄死を予想して『乱雲驚濤』を書き埼玉県在住の親友白倉甲子造をたずねてこれを贈つた。このとき赤羽の胸中には、すでに死が予想されていたのである。獄中から親友へ書き送つた書翰にも生きて出られぬとあつた。腸カタルで悩まされても看守のすすめる医薬も受けず、ハンガーストライキで獄死するとい

うのは、運動は慎重にそして漸進的にと説いた赤羽らしくない死に方のようにも考えられよう。しかしながら、三十七年の赤羽の生涯を総括して見るとこの獄死の方法は赤羽の必然のコースであつたように思える。幸徳秋水は無実の罰で死刑にされた。田添鉄二は肺病で逝つた。幸徳も田添も、もつと生きさせて置きたかつたという感慨が湧くのであるが、赤羽がこのような死に方を選ぶのは必然であつて、それ以外の道は彼には存在しなかつたように思う。幸徳も田添も、彼等が今日生きていたらあのような死に方はしなかつたらうが、赤羽は今日でも獄中か獄外かはわからぬがやはり自らの手で生命を断つ人間であると思う。

如何も貴様の言うことは不健全で困る、病的で困る、不論理で困る、天下の人心を誤るものであると言つて怒る俗物もあるかも知れぬ。成程或は不健全であらう、病的でもあらう、不論理でもあらう。又或は天下の人心を誤るものがあるであらう。(中略) 僕
の思想を不健全と言うのは、社会自身が不健全なからだ、病的なからだ、不論理なからだ。もし社会が良心のある社会であり、人間が人間らしい人間であるなら僕の言う所を不健全とする理由がない、病的とする理由がない、不論理とする理由がない、却つて健全な、大胆な、直截な、清新な思想として歓迎せねばならぬ
(註6)
筈だ。

いわゆる病的であり、不健全なる思想は、現実の社会体制の中で飼育された考え方は切り開けないような社会の病毒にメスを入れ

ることがある。赤羽は明治の社会主義者の中でもとりわけ規格外の思想をもつた人であつた。そして彼は自分の規格外れの思想を割合いと露出させている。その点、明治社会主義者の思想と行動を探索上に見逃し得ないのである。

註(1) 『新紀元』を輓す(『新紀元』明治三十九年十一月十日 終刊号)

(2) 前掲「赤羽一の『改良と革命』のメモについて」

(3) 右同。

(4) 『社会主義者沿革』複製版中巻三一六―八頁。

(5) 石川三四郎『自叙伝 上』(理論社 一九五六年七月) 一九六

頁。

(6) 前掲『嗚呼祖国』百二十九―百三十頁。

(後記) 資料収集については品川力氏に大変お世話になつた。

記して心から感謝したい。